

小川遺跡

久留米市文化財調査報告書 第216集

2005. 11

久留米市教育委員会

序

平成17年2月5日をもって、新久留米市が誕生しました。九州随一の大河筑後川に育まれた自然を基に農業、工業、商業と筑後地域の中核都市としてその飛躍が期待されます。そのために、合併により新たに久留米市となった田主丸、北野、三潴、城島の4町の個性を再認識し、新市の特色とすることが必要不可欠であると言えます。

地域の個性が重要視される昨今、その礎となる風土、伝統を受け継ぎ、伝えるという作業は文化財保護行政の根幹であるといえます。本市では市内にある数多の遺跡の発掘調査を行っており、日々の発掘で得られた成果は各地が辿った歴史を解明する手掛かりとして、重要な役割を担っています。

本書は、田主丸船越地区に所在する「小川遺跡」の報告です。古くは船越郷として「和名抄」に記されている地域で、その片鱗は船越宮ノ前遺跡、高原遺跡、一ノ上遺跡等の発掘調査の成果として表れています。今回の調査でも同時期と想定される竪穴住居が確認され、また、中世豪族の小河氏の館跡にあたる地区でもあり、その究明の端緒となる調査でもあります。

今回の発掘調査の報告が、久留米地域史研究、文化財保護の理解、普及の一助となれば幸いです。末文ながら、発掘調査及び附随する調査報告書作成に当たり、多分なるご理解と御協力を賜りました地域住民の皆様並びに工事関係者をはじめ、関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成17年11月30日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成16年度から平成17年度に福岡県久留米土木事務所の委託を請けて発掘調査を実施した、主要地方道久留米浮羽線改築に伴う小川遺跡発掘調査の報告である。
2. 平成16年度に実施した発掘調査は、田主丸町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財係江島伸彦が担当した。平成17年2月5日の久留米市との合併により、平成17年度に行った報告書作成業務については久留米市にて継続し、文化観光部文化財保護課江島伸彦が担当した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は、主に江島が行い、別府智範の協力を得た。また、遺物、拓本及び清書は、中野美代子、永瀬美保子、江島が行った。
4. 空中写真を除く遺構の撮影は、江島が行い、空中写真の撮影は空中写真企画に委託して行った。遺物の撮影については、園井正隆の指導を仰ぎ、江島が行った。
5. 本書に使用した方位は全て磁北である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標による。
6. 本書に使用した遺構表記は下記の記号による。
SD：溝、溝状遺構 SI：竪穴住居 SK：土壇 SP：ピット、柱穴
7. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
法量の数値はcmである。また、（ ）内の数値は現存値を示す。
 - ・ 色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行：1997年版）による。
 - ・ 胎土は0.5mm未満の砂流を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒とした。
8. 調査に関わる遺物、記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用される予定である。
9. 本書の執筆、編集は江島が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経緯	2
第2章 位置と環境	3
第3章 小川遺跡の調査	4
第1節 基本層序	4
第2節 1区の調査	4
第3節 2・3区の調査	10
第4章 まとめ	13

図版目次

図版1-1	調査区より北を望む	図版5-20	SD92土層断面
図版1-2	調査区遠景(西より)	図版5-21	SK66検出状況
図版2-3	第1調査区全景(東より)	図版5-22	SK66検出状況
図版2-4	第2調査区全景(東より)	図版6-23	出土遺物
図版3-5	第3調査区西側全景(北より)	図版6-24	出土遺物
図版3-6	第3調査区東側全景(西より)	図版6-25	出土遺物
図版4-7	S12検出状況	図版6-26	出土遺物
図版4-8	S123検出状況	図版6-27	出土遺物
図版4-9	S133・34・35検出状況	図版6-28	出土遺物
図版4-10	S147検出状況	図版6-29	出土遺物
図版4-11	S148検出状況	図版6-30	出土遺物
図版4-12	S194・99検出状況		
図版4-13	S198検出状況		
図版4-14	S1100検出状況		
図版5-15	SD1検出状況		
図版5-16	SD14検出状況		
図版5-17	SD92検出状況		
図版5-18	SD96検出状況		
図版5-19	SD97検出状況		

挿図目次

第1図	遺跡位置図 (1/25,000)	2
第2図	遺跡周辺図 (1/5,000)	3
第3図	基本層序模式図	4
第4図	調査区位置図 (1/1,000)	折り込み
第5図	調査1区遺構配置図 (1/200)	折り込み
第6図	調査2区遺構配置図 (1/100)	折り込み
第7図	調査3区遺構配置図 (1/200)	折り込み
第8図	S I 2実測図 (1/60)	5
第9図	S I 23実測図 (1/60)	5
第10図	S I 33実測図 (1/60)	5
第11図	S I 34実測図 (1/60)	5
第12図	S I 35実測図 (1/60)	5
第13図	S I 47・48・94・99実測図 (1/60)	5
第14図	S I 98実測図 (1/60)	6
第15図	S I 100実測図 (1/60)	6
第16図	S D 1土層断面図 (1/20)	6
第17図	S D 14土層断面図 (1/20)	6
第18図	S D 92土層断面図 (1/20)	6
第19図	S D 96土層断面図 (1/20)	6
第20図	S D 97土層断面図 (1/20)	6
第21図	S K 50実測図 (1/40)	9
第22図	S K 51実測図 (1/40)	9
第23図	S K 53実測図 (1/60)	9
第24図	S K 65実測図 (1/40)	9
第25図	S K 66実測図 (1/40)	9
第26図	S K 90実測図 (1/40)	9
第27図	S K 93実測図 (1/40)	9
第28図	S K 104実測図 (1/40)	11
第29図	S K 105実測図 (1/40)	11
第30図	S K 106実測図 (1/40)	11
第31図	S K 107・108実測図 (1/40)	11
第32図	出土遺物実測図 (2・17は1/2、その他は1/4)	12

表目次

第1表	遺物観察表	14
-----	-------	----

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

平成14年度に福岡県久留米土木事務所から福岡県教育委員会文化財保護課に浮羽郡田主丸町大字船越外について埋蔵文化財の有無の照会が行われ、工事予定地の一部が小川遺跡地内に当たることを確認した。試掘を行った結果、遺構が約40cmで確認された。福岡県教育委員会文化財保護課より福岡県久留米土木事務所に対して道路改築に当たっては発掘調査が必要であることが報告された。

これを踏まえ、福岡県久留米土木事務所、福岡県教育委員会文化財保護課及び田主丸町教育委員会の三者間で協議し、田主丸町教育委員会が発掘調査を行うことが決定したが、調査の時期については用地買収が完了後、再度、協議する旨を確認した。

平成15年度当初に福岡県文化財保護課が福岡県久留米土木事務所管内事業の埋蔵文化財の事前確認を行った際、来年度、着工予定との情報を得た。平成16年3月に7月より着工するため発掘調査着手の依頼があり、6月議会にて予算の補正を行い、協定書を交わした。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。報告書作成においては、平成17年2月5日の合併により田主丸町は久留米市となり、文化観光部文化財保護課にて業務を行った。

平成16年度

平成17年度

久留米土木事務所

所長 内金 豊治
道路課長 桒原 精治
建設係長 金子 喜年
担当 光安 幸一

所長 馬場 満
道路課長 桒原 精治
建設係長 金子 喜年
担当 光安 幸一

福岡県教育庁北筑後教育事務所

生涯学習室文化班 岸本 圭

田主丸町教育委員会

教育長 古賀忠義
生涯学習課長 須山正樹（～4月）
小林一成（5月～）
主幹兼文化財係長 吉岡秀蔵

久留米市文化観光部

文化観光部長 緒方真一
文化財保護課長 関 知彦
課長補佐兼主査 立石雅文
事務主査 松村一良

文化財係 丸林禎彦（～9月）
（調査担当） 江島伸彦

庶務担当 権藤節子
報告書担当 江島伸彦

発掘調査作業員

熊谷秋子、大熊澄子、石井弘子、吉弘エミ子、行徳淑子、栗林ヨリ子、竹内由美子、別府智範、
江藤敏

第3節 調査の経緯

事業計画では道路の新設部分と、既設道路の拡幅部分とに別れ、且つ、既設道路は小川区の生活道路であることから建設予定地全ての調査は不可能であった。そのため、調査区は3箇所に分けた。便宜上、東から1区とし、調査順に2区、3区とした。

調査は7月10日から重機を投入し、表土剥ぎを開始した。試掘結果のとおり地表より約40cmで遺構面に達した。この面で遺構の検出を試みたが、確認できず、更に10cm程掘り下げた結果、遺構を確認し広げていった。1区の西から東へ作業を進めていったが東に行くに連れ、地山の色調が暗茶褐色から茶褐色に変化していった。この茶褐色土に遺構が確認されたため、このままの深さで作業を完了した。

同日、作業道具、コンテナハウス、仮設トイレの搬入を行った。翌日から表土剥ぎと並行して遺構検出を行った。その後、黄褐色の地山の下層を確認するため、南壁にトレンチを設定し、掘り下げた。黄褐色土の堆積は約20cmで茶褐色土となり、更にその下、約30cmのところで暗茶褐色砂質土を確認した。この時点で生活面が2面存在する可能性を考慮した。

遺構の掘り下げはビットから行い、並行して平板による1/50の遺構配置図を作成した。調査区の遺構数は153を数える。これに伴って掘立住建物の確認に努めたが、明確にそれと言えるものはない。その後、住居、土壌等を1/10による個別実測を行い、全体図は1/20にて作成した。併せて写真撮影を行ない、遺跡の全体写真は、高所作業車を使用して行った。1区の埋め戻しは9月2日から行った。引き続き、2区の表土剥ぎを行い、9月3日に終了した。他の現場を並行して行い、3区は10月2日～10月18日まで行い、調査を全て終了し、10月19日に撤収した。



1. 小川遺跡 2. 船越一ノ上遺跡 3. 千代久遺跡 4. 松門寺遺跡 5. 船越宮ノ前遺跡 6. 船越高原遺跡 7. 殖木平田遺跡
8. 殖木地区遺跡群A地点 9. 殖木地区遺跡群B地点 10. 廣取一乗遺跡 11. 廣取切町遺跡 12. 力常遺跡（散布地）
13. 秋成遺跡（散布地） 14. 豊秋遺跡（散布地）

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

第2章 位置と環境

平成17年2月5日に久留米市、浮羽郡田主丸町、三井郡北野町、三潯郡三潯町、同郡城島町の1市4町が合併し、新久留米市として新たにスタートした。今回の合併により新市は人口30万6千人、面積229.84㎡となり、旧久留米市の1.5倍の規模となった。

市域は筑後川中・下流域の沖積平野部と八女丘陵から派生した台地並びに耳納連山から派生した台地から構成される地形を呈する。これら多様な地形は、立地によって各種の遺跡を残す。耳納山麓には、群集墳の密集地帯として知られ、その中には下馬場、寺徳古墳等の装飾古墳が含まれ、全国でも有数の装飾古墳の分布域である。また、平野部でも御塚、権見塚、石櫃山、田主丸大塚古墳等の前方後円墳が造営され、水沼君、的臣と呼ばれる豪族との関連が指摘されている。

今回、報告する小川遺跡は久留米市田主丸町船越1130外に所在し、小川区の集落内に広がる遺跡である。周辺には弥生時代中期を主体とする集落のノ上遺跡、縄文晩期、古墳時代前期を主体とする千代久遺跡、古墳前期の集落の高原遺跡、古墳後期から奈良時代にかけての集落を主体とする宮ノ前遺跡が周知されている。これらは平成3年～平成8年にかけて行われた県営圃場整備事業に伴う発掘調査の成果として、田主丸町教育委員会から報告されている。この他には未調査ではあるが、開発に伴って裏棺が出土している秋成遺跡が散布地として知られている。

前述のように弥生～古代にかけての遺跡が主体であるが、小川遺跡については古くから小河氏の根拠地として知られ、古文書にも記されている。集落の中には小河氏居城跡の碑が建ち、その範囲は田主丸町の郷土史家上野美之氏による研究において推察されている。



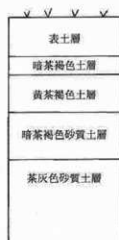
第2図 遺跡周辺図 (1/5,000)

第3章 小川遺跡の調査

第1節 基本層序

遺跡の東壁にて土層を確認した。地表の堆積は約20cm、その下層約20～30cmの深さで暗茶褐色土が現れた。土質に絞まりがあり、安定した堆積であったため、遺構の検出に努めたが、確認するに至らず、さらに約10cm掘り下げた。土色の変化はないがやや砂質を帯びた茶褐色土に変わり、この面で遺構を確認した。この高さで掘り上げて行くと1区東側では土色が変わり、黄茶褐色土層となった。この変化の境にトレンチを設定し、黄茶褐色土層が上層であることを確認した。さらに、茶褐色土層の下、茶灰色砂質土層の面で溝状遺構の存在を確認した。

これらの状況を第3図に模式図を図示する。調査1区では、生活面が3面存在し、上から1面：近世、2面：奈良～中世、3面：弥生時代となる。



第3図 基本層序模式図

第2節 1区の調査

1区で検出した遺構は104を数える。その内訳は、溝状遺構5条、竪穴住居11棟、土壇14基、ピット74個である。その他、不明土壇が1基あるが底から現代の瓦が多量に出土したため攪乱である。

竪穴住居

S I 2 (図版4-7、第8図) 1区東側、第1生活面から検出。調査当初、西側と同一時期と考えていたが、出土遺物から上面の遺構と判断した。床面には地山と同じ黄茶褐色土の張り床を施す。その厚みは4～6cmであった。壁は殆ど削平され、床面のみが残った状態である。張床を外し、柱穴の確認を試みたが、明確なものは存在しない。南壁付近の埋土には、炭化物が含まれていた。

5 瓦質土器の火鉢の口縁が。口縁の形状は内側に屈曲する。残存高4.5cm、厚さ1.1cm。内面の調整は粗い刷毛目状を施す。指圧痕が部分的に残る。外面はナデ調整で2条の沈線の下に等間隔に紋様を施す。胎土には砂粒で金雲母、長石を含む。色調は内外面共に黒灰色。

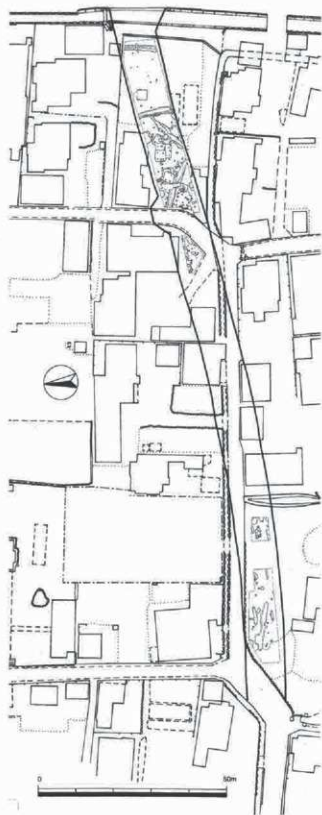
6 青磁碗の口縁部。残存器高3.4cm、厚さ0.4cmを測る。色調は緑灰色。内面に紋様を施す。

7 瓦質土器の甕か。残存高6.7cm厚さ口縁付近で0.9cmを測る。内面は刷毛目調整、外面は指オサエを施す。胎土は細粒で金雲母、長石を含む。色調は外面灰褐色、内面灰黄色。

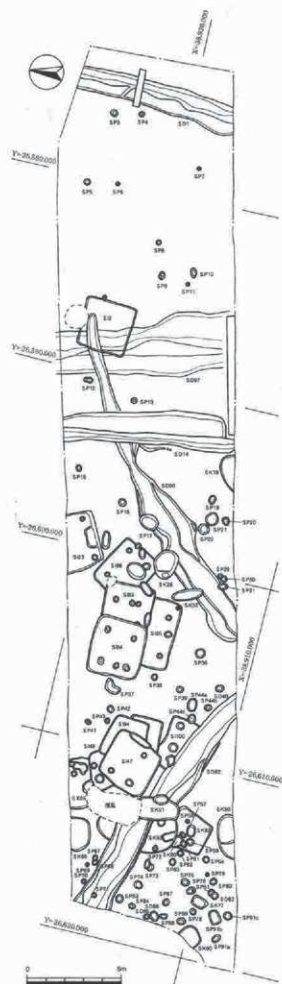
S I 23 (図版4-8、第9図) 1区北東部第2生活面から検出。平面プランは方形であるが、北側半分が調査区外のため、北壁が検出されていない。法量については不明。確認部分を測る。南壁に柱穴らしきピットを確認するが浅く不明瞭である。埋土に焼土は含まれていない。出土遺物は土師器細片のみ。

S I 33 (図版4-9、第10図) 1区中央部から検出。西壁がS I 33に切られているが、平面プランは正方形を呈す。柱穴を確認していない。遺構内のピットは住居とは関連せず、後のものである。カマドの痕跡を確認していない。出土遺物なし。

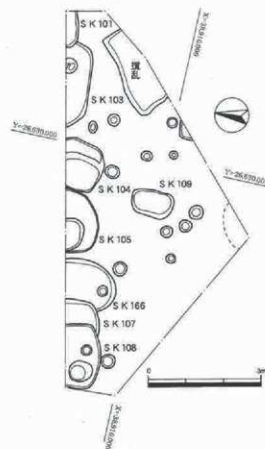
S I 34 (図版4-9、第11図) S I 33、35を切る。平面プランは東西に若干長い長方形を呈す。柱穴は4本検出。東壁側に掘方を確認した。遺構検出の際には確認できず、床面精査時に検出した。しかし、住居に伴うとは考えられず、上からの掘り込みであろう。土壇の深さは残存で約30cmである。中に40cmを超える大型の礫が2つ重なった状態で検出された。出土遺物なし。



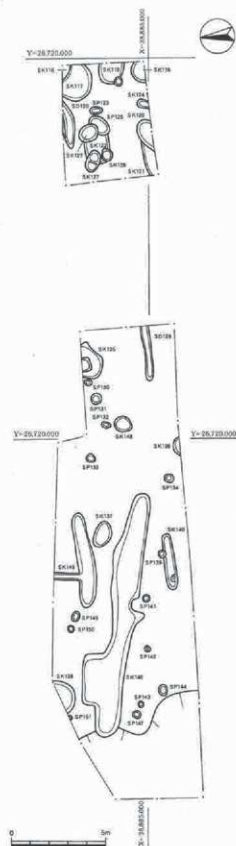
第4図 調査区位置図 (1/1,000)



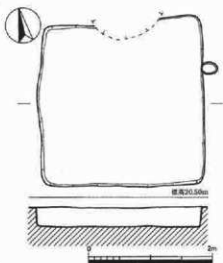
第5図 調査1区道橋配置図 (1/200)



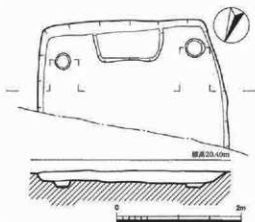
第6図 調査2区道橋配置図 (1/100)



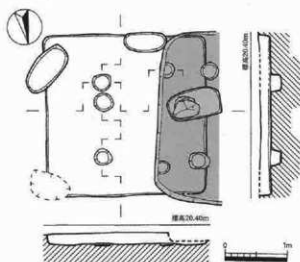
第7図 調査3区道橋配置図 (1/200)



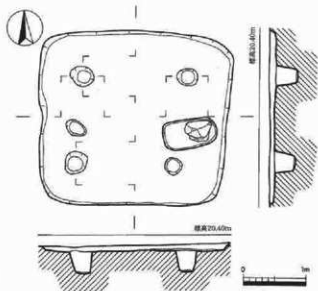
第8図 S I 2実測図 (1/60)



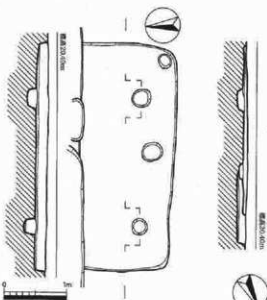
第9図 S I 23実測図 (1/60)



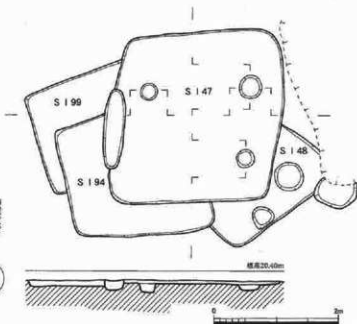
第10図 S I 33実測図 (1/60)



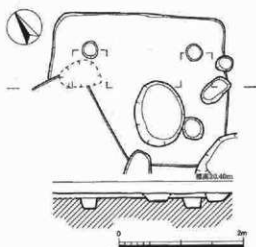
第11図 S I 34実測図 (1/60)



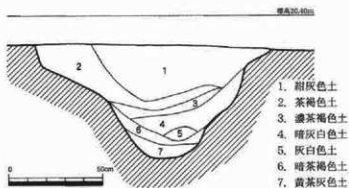
第12図 S I 35実測図 (1/60)



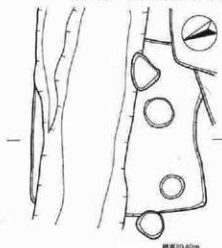
第13図 S I 47・48・94・99実測図 (1/60)



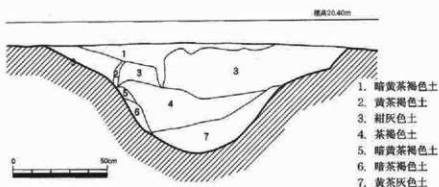
第14図 S198実測図 (1/60)



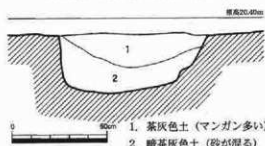
第18図 SD92土層断面図 (1/20)



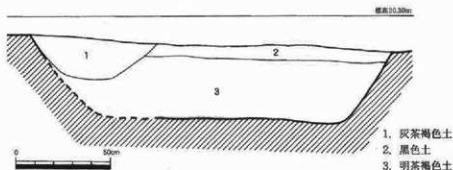
第15図 S1100実測図 (1/60)



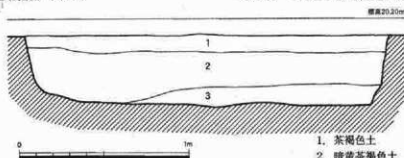
第19図 SD96土層断面図 (1/20)



第16図 SD1土層断面図 (1/20)



第17図 SD14土層断面図 (1/20)



第20図 SD97土層断面図 (1/20)

S I 35 (図版4-9、第12図) 北側の半分以上をS I 34に切られる。柱穴は2箇所検出。削平を受けているため、北壁については詳細不明。出土遺物なし。

S I 47 (図版4-10、第13図) 1区西側中央より検出。溝状遺構SD92の北側に位置し、S I 48、S I 94、S I 99を切る。平面プランはやや歪ながら正方形を呈す。柱穴を北壁側に2箇所、南壁側に1箇所確認したがかなり浅い。南東側の柱穴は方形の掘方によって残存しない。柱穴間の距離は1.62mである。カマドは確認していない。南東隅の掘方は上面に礫が浮いており、何らかの基礎であった可能性がある。その他、南壁をSK46に切られる。このSK46の埋土は橙褐色土が混ざる。出土遺物なし。

S I 48 (図版4-11、第13図) 南西部分をS I 47、S I 94に切られる。また、北隅は攪乱によって削平を受ける。S I 47よりも3cm程深いため、平面プランは確認できる。S I 94に対しては削平を受ける。住居内のピットは上からのものであるため柱穴は確認していない。焼土は確認できない。出土遺物なし。

S I 94 (図版4-12、第13図) 北西部分をS I 47に切られるが、S I 48と同様に3cm程深く、平面プランが残存する。北壁が広い歪な方形を呈す。柱穴は確認できず、出土遺物もなし。

S I 98 (図版4-13、第14図) S I 33に切られる。平面プランは南北にやや長い長方形を呈す。柱穴は3箇所検出。残り1箇所は攪乱のため検出できていない。楕円形を呈す土壌の関連はない。出土遺物なし。

S I 99 (図版4-12、第13図) プランの大半をS I 48、S I 94、S I 99に切られる。4棟の中で最も床面までが深い。プランを確認することができなかった。残存形態からは南北に長い長方形を呈すと考えられる。柱穴、遺物は確認していない。

S I 100 (図版4-14、第15図) 1区南東部より検出。中央の大半をSD92に北隅をS I 47に切られるため、残存状況が悪い。深さは0.1mである。平面プランは正方形を呈す。柱穴、出土遺物なし。

溝状遺構

SD1 (図版5-15、第16図) 1区第1遺構面東端から検出。南北方向に延びる。幅1.29m、深さ約0.32mを測る。遺構の西側は浅く、テラス状を呈し、深さ0.08mである。土層観察からテラス部分と溝部分で分層され、溝部分が東側より幅0.88mとなる。これは表面上でも確認でき、1・2層が3層を切っており、別の遺構とも考えられる。出土遺物は土鏝、甕把手、土師質土器、青磁片、磁器の小碗、瓦質土器及び磁器細片で、床面直上で確認したものはないが、土師質土器、青磁片が下層から出土した。

1 甕 把手。残存長5.8cm、3.5cmを測る。表面の調整は篋ケズリを施す。0.1~0.7cmの砂粒で胎土には長石を含む。色調は橙褐色。

2 土鏝。先端部が欠損する。残存長2.9cm、直径、0.9cmを測る。0.1~0.7cmの砂粒で胎土には長石を含む。色調は赤茶褐色。

3 器種不明。須恵器。高さ4.0cm、厚さ0.9cmを測る。下部に突帯状の突起がある。その下は折れている。上部も湾曲し、厚みが増す。壺の類いか。調整は突帯の上にカキ目を施し、突帯付近1cmまでを横ナデする。カキ目上部はナデ調整を施す。僅かに残る湾曲部分には横ナデを行う。内面は指オサエである。これら3点は、上層より確認し、流れ込みであると考え。

4 白磁碗。小型で口径8.0cm、高さ4.4cmを測る。高台と器の取り付け部には1条の線が巡る。紋様は波線によって三角形を構成する紋様とその間に直線による菱形を構成する紋様が施される。内面は無紋である。

SD14 (図版5-16、第17図) 1区第1遺構面中央端やや東より第1遺構面と第2遺構面の境付近から検出。SD1同様、南北方向に延びる。二条の溝が重なり、トレンチによる土層確認から東側幅広の溝状遺構の西側立ち上がりは細い溝の西側掘方と一致する。幅広の溝をa、細い溝をbとする。両者の埋土は一括土でaが明茶褐色土、bが灰茶褐色土。遺物は土師質土器の細片、瓦器の甕、瓦がaの溝から出土している。14aが幅1.92m、深さ0.38mを測り、14bは幅0.76m、深さ0.24mを測る。

SD92 (図版5-17・5-20、第18図) 1区北西から中央部南にて検出。最大幅1.82m、深さ0.61mを測る。両掘方にテラスが設けられる部分があり、これはSD96も同様な形状を呈す。遺物は弥生土器片、土師器片があり、どちらも上層からの出土であった。

9 土師器の高杯。残存器高4.1cm、厚み0.4cmを測る。底部は更に薄く0.2cmである。胎土は細々粒で、精緻な作りである。底部から口縁への立ち上がりの部分は明瞭である。色調は橙褐色。器壁が摩滅しており調整の詳細は不明である。磨きが施されるか。

SD96 (図版5-18、第19図) 1区北西から中央部南から北東方向に検出。SD92同様にテラスを設ける部分がある。北東へ向かって一部狭くなる。また、SD14に切られた先で消滅する。このSD14から東の部分は第1遺構面の下から検出される。最大幅1.6m、深さ0.6mである。遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器甕片、黒色土器B類口縁細片が確認されるが全て上層からの出土である。

10 土師器の杯。精緻な作りである。残存器高4.5cm、厚さ0.3cm。胎土に長石を含む。色調は浅黄橙色。

SD97 (図版5-19、第20図) 1区東側、第3遺構面より検出。SI2の下層に位置する。最大幅2.1m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形であり、埋土は砂質土の2層に分層される。弥生土器の甕口縁等が出土している。

11 弥生土器の甕。残存器高5.6cm、厚さ口縁部が0.7cm、胴部が0.4cm。口縁下に刷毛目調整を施す。内面はナデ調整。胎土は細粒で角閃石、金雲母を含む。色調はにぶい橙色。

12 弥生土器の壺胴部。突帯が残る。残存器高2.8cm、厚さ0.6cm、外面に丹塗りを施す。胎土は細粒で長石を含む。色調は暗橙褐色。

13 弥生土器の壺の底部か。底部の径10.8cmを測り、残存器高4.9cmである。外面の調整は刷毛目調整で、底面は丁寧にナデ調整を施す。内面についてもナデ調整を行う。

土壌

土壌としたものは16基を数える。その内、図示したものは7点である。SK18、SK24、SK27、SK28、SK32、SK46、SK52、SK77については、不定形な小型のものであり、割愛している。

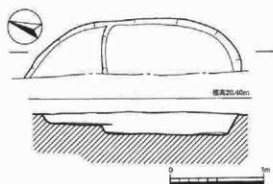
SK50 (第21図) 1区西側南境界より検出。遺構南側は、調査区外となる。平面プランは楕円形を呈す。出土遺物なし。

SK51 (第22図) 1区西側中央部より検出。平面プランは方形に近い楕円形を呈す。出土遺物なし。

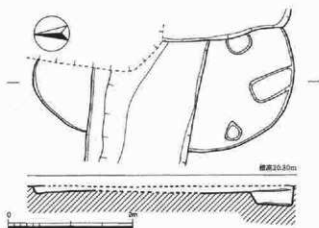
SK53 (第23図) 1区西側中央部より検出。SK51、SD92に切られ、SK93を切る。平面プランは大型の楕円形を呈す。出土遺物なし。

SK65 (第24図) 1区西側北境界より検出。SI48に切られ一部調査区外である。平面プランは円形を呈す。出土遺物なし。

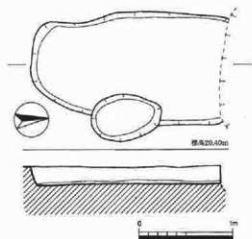
SK66 (図版5-21・5-22、第25図) 1区西側北境界、SK65の西隣より検出。平面プランは楕円形を呈す。土師器の皿が出土している。



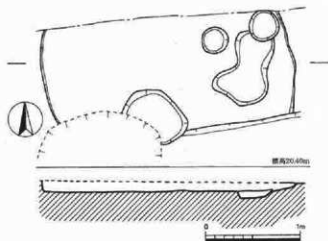
第21図 SK50実測図 (1/40)



第23図 SK53実測図 (1/60)



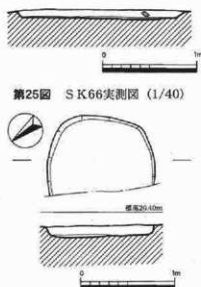
第22図 SK51実測図 (1/40)



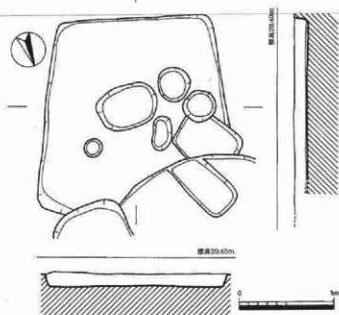
第24図 SK65実測図 (1/40)



第25図 SK66実測図 (1/40)



第26図 SK90実測図 (1/40)



第27図 SK93実測図 (1/40)

8 土師器の小皿。器高1.6cm、口径9.4cm、厚さ0.4cmを測る。底面は凸状で口縁への立ち上がりが明瞭である。調整は、横ナデ、底面は篋切り。

S K 90 (第26図) 1区西境界より検出。半分程が調査区外となる。平面プランは楕円形を呈す。出土遺物なし。

S K 93 (第27図) 1区西南部より検出。S K 51、53に切られる。平面プランは東西に長い長方形を呈す。住居とも考えられるが、柱穴は確認できていない。出土遺物なし。

掘立柱建物及びピット、包含層出土遺物

1 区南西隅にピット群が集中しているが、調査時では明確に掘立柱建物を確認していない。S P 80～S P 90で建物立つ可能性がある。

14 弥生土器の甕の口縁。復元口径16.0cm、厚さ0.7cm。胎土は1ミリ程度の砂粒を多く含み、角閃石、長石、金雲母を含む。色調は橙色。

15 土師器の甕。残存器高4.9cm、厚さ1.5cmを測る。口縁は大きく外反し、胴部は頸部に比べ、薄くなる。外面から頸部にかけて横ナデ調整が残る、胴部内面は指オサエを行う。胎土は長石、3～5ミリの砂粒を含む。色調は浅黄橙褐色。

16 甕。把手。先端が欠損している。甕本体との接合部には半円状の凸部が残る。篋削り調整を施す。胎土は長石、石英を含む。色調は浅黄褐色。

17 鉄鍔の茎。篋代の部分と鍔身の部分が欠損する。断面は四角形を呈し、厚さ0.4cmを測る。残存長7.1cmを測る。

18 不明器種の胴部。土師質土器。残存器高8.8cm、厚さ1.2cmを測る。突帯を配し、その上部にカキ目状の調整を施す。下側は横ナデ。さらに刻印を押す。内面は刷毛目及び指オサエ。胎土は細粒で金雲母を含む。色調は外面が黒褐色。内面が鈍い褐色。

20 甕の口縁。口縁上に5条の沈線が巡る。内外面共に粗い刷毛目を施す。残存器高7.5cm、口縁端の厚さ3.4cm、胴部1.7cmを測る。胎土は金雲母を含む細粒。色調は灰黄色。

21 器種不明。表面及び側面には篋磨き調整を施す。裏面は何らかに接着していたと考えられる。また、凹み部分に粘土を充填し、何らかの工具で押さえつける。

22 丸瓦の玉縁。裏面に絞り痕が残る、狭端面には斜めに切り込まれた面がある。

23 瓦。S P 19より出土。熨斗瓦か。図面下側の側面及び斜めの部分の側面は意図的に切断されている。三角形に成形したと考える。残存長15.7cm、厚さ1.1cmを測る。内外面共に粗い刷毛目調整を施す。色調は黒灰色。

第3節 2・3区の調査

2区については、1区に隣接するので層位は同じく、遺構面は砂質土である。土壌8基、ピット7個で構成され、総数15を数える。3区は調査対象地の西端に位置し、民家の出入り口に当たる部分を除いたため2つに分割される。層位は他の調査区と相違ないが、遺構面に礫が多く含まれる。土壌17基、溝状遺構2条、ピット13個で構成され、総数32を数える。3区については、遺構の深度が浅く、且つ、出土遺物もないため、詳細については省略する。

土坑

S K 104 (第28図) 2区の北側境界に位置する。一部、調査区外であるが平面プランは南北に長い楕円形を呈すと推測される。東側にはテラスがあり、深さ0.08m。中央部に礫が横たわる。一方の礫は床面にその下半を埋没させる。東西に1.27mを測り、深さ0.19m。瓦器及び土師器の細片が出土している。

S K 105 (第29図) 北側が調査区外であるため、平面プランは東西に長い楕円形を呈す。西側が深くなっている。東西に1.69m、最深部で0.12mを測る。瓦器片、土師器片が出土している。

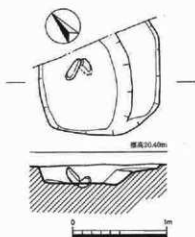
S K 106 (第30図) S K 105の西隣にあり、S K 107に切られる。床面にピットを配する。残存長東西に1.31m、南北に1.36m、深さ0.07mを測る。出土遺物なし。

S K 107 (第31図) S K 108に切られる。残存長0.89m、0.69m、深さ0.13mを測る。土師器片が出土している。

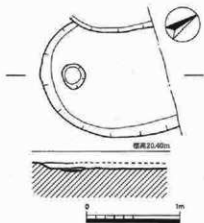
S K 108 (第31図) 北側が調査区外。S K 107を切る。やや角張った楕円を呈す。床面に大小2つのピットを配す。東西長1.72m、南北の残存長0.95m、深さ最深部で0.16mを測る。土師器、瓦質土器の皿、瓦器片が出土している。

19 土師質土器の皿か。残存器高1.6cm、底径6.2cmを測る。底面に回転糸切り痕が残る。内外面とも横ナデ調整を施す。胎土は砂粒で金雲母を含む。色調は灰白色。

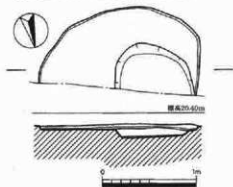
S K 109 2区中央から検出。楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。遺物は黒色土器の細片等が出土している。



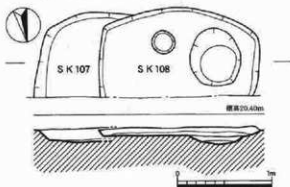
第28図 SK104実測図 (1/40)



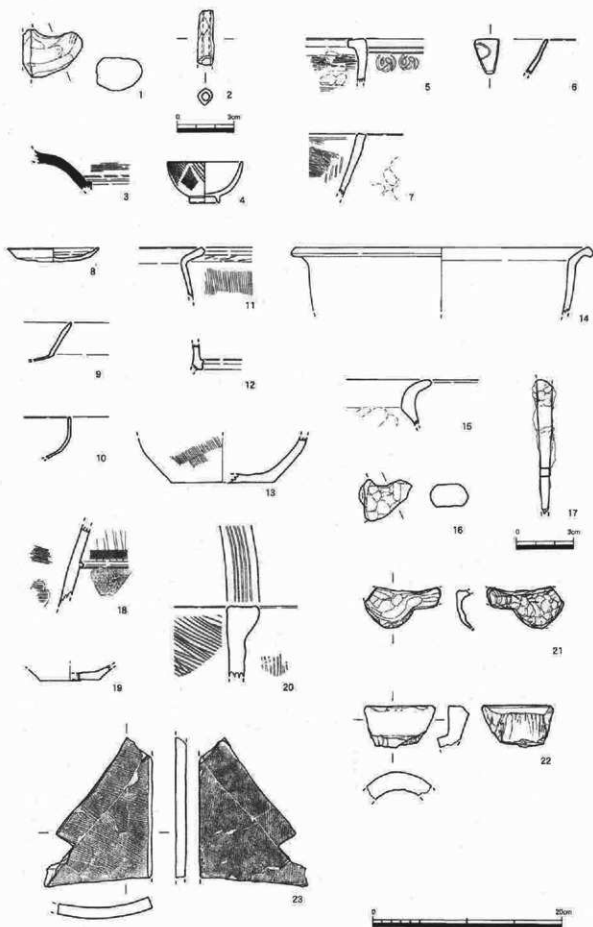
第30図 SK106実測図 (1/40)



第29図 SK105実測図 (1/40)



第31図 SK107・108実測図 (1/40)



第32図 出土遺物実測図 (2・17は1/2、その他は1/4)

第4章 まとめ

第1節 遺跡について

今回の調査では、当初、中世の豪族居館跡として周知されている遺跡であったが、予想に反して、これらに関する明確な遺構、それに伴う遺物を確認することが出来ず、小型の住居跡を主体とした集落遺跡が主体であった。

S I 2の上層では近世に比定できる火鉢の口縁が出土し、また、包含層中からは中世土器が若干量ではあるが出土している。その他にも、ビットから黒色土器B類の細片が出土しており、このことは中世から近世に及ぶ遺構が存在したことを想起させる。第1遺構面と第2遺構面の関係は前者が中世～近世、後者が奈良～中世に概別できる。東側での第1遺構面の堆積土は20～30cmあるが、調査区西側では存在せず、削平されたが、元々第2遺構面の落ちに堆積したと考えられる。どちらにせよ、第2遺構面西側は旧地形として東側より30cm程高くなっている。

この高まりに奈良～中世にかけての遺構が広がる。主に竪穴住居が検出されており、一辺が3m程の小型住居で同一箇所を重ねて検出される。住居跡の集中域は2箇所あり、これが建て替えと仮定するならば、それぞれ、5～6回の改築が行われているようである。

当地域で8世紀にみられる竪穴住居跡遺構の検出状況であるが、住居跡に遺物が伴わず、また、竈を付設する住居跡も見当たらないことから断定は出来ない。その他の遺構についても遺物が少なく、時期の特定には至っていない。

溝状遺構については、S D 1及びI 4が中世～近世のものであろう。第3遺構面から検出されたS D 97は埋土及び第2遺構面埋土中から弥生土器が出土しており、弥生時代のもと考えられる。第1調査区東側にあるS D 92は、S I 43に切られ、S I 100を切る状況で検出したが、埋土中から黒色土器B類が出土し、且つ、S I 43、S I 100に時期差が殆ど無いことからS I 43との切り合い関係は逆であろう。従って、S D 92は近世頃に埋没した溝であろう。S D 96はS D 92と関連がありそうだが、交差する部分が調査区外のため、詳細については不明である。その他、S K 66は楕円形を呈す土壇で、ここから小皿が出土しており、土壇墓であろうか。10世紀頃に位置付けられよう。

周辺には一ノ上遺跡が東に広がる。この遺跡は弥生時代を中心とした遺跡で小川遺跡の第3遺構面の溝状遺構は一ノ上遺跡と関連するものであろう。また、住居跡についても南東に広がる宮ノ前遺跡に奈良時代の住居跡群があり、関連が想起される。

第2節 小河氏について

小川遺跡のある船越小川区は、中世の小河氏の居館跡と言われている。この小川区一帯の田畑は古来、小河庄と呼ばれ、安楽寺（太宰府天満宮）領の荘園としてしられる。観応3年（1352）の安楽寺領注進状に「小河庄凶徒押領」との記述が残っている。また、小河文書「右馬頭親賢施行状」に「竹野郡小河庄七拾町」とあるが、庄域の詳細については不明である。

この小河庄の由来は在地領主である小河氏からのもので配録に残る人物は、大友持直が竹野郡に群代職を置いた際、その一人に小河藤次郎を任じ、続いて、大友親繁が小河伊賀守を任じたとある（「大友持直預け状」）断片的な記述で小河氏についての詳細は不明である。この他、現地には伝小河伊賀守之墓が第3調査区の南にあり、同時に館跡とも伝えられる。これについては、第1調査区の端の現水路が環濠であったとされている。今回の調査では、居館跡と決定付ける資料を確認するに至っていない。

通称・心	出土遺構	出土遺物	器 種	法 量			色 質		図 案・設 計		附 土 [石材]	備 考	登録番号
				口径 (径)	底径 (径)	器高 (高さ)	外 面	内 面	外 面 (凸部)	内 面 (凹部)			
第30段1	SD-1	土師器	甕 (肥子)	(口径3.3cm)	(底径5.0cm)	(高さ3.5cm)	暗褐色		ナデ				20042600001
第30段2	SD-1		土甕	(2.3cm)	(0.9cm)	(0.6cm)	赤褐色		ナデ				20042600002
第30段3	SD-1	須恵器	不明	(口径4.2cm)		(0.8cm)	青灰色		横ナデ、カキ目	ナデ・オサエ			20042600003
第30段4	SD-1	須恵器	通称分展	8.0cm	3.2cm	4.4cm	白色		ナデ				20042600004
第30段5	S-2	瓦質土器	火鉢	(口径4.5cm)		(0.4cm)	黒色						20042600007
第30段6	S-2	青磁	瓶	(口径3.4cm)		(0.5cm)							20042600006
第30段7	S-2	瓦質土器	甕?	(口径6.7cm)		(0.6cm)	黒色		ナデ				20042600005
第30段8	SK-66	土師器	皿	9.0cm	7.8cm	1.4cm	暗褐色		横ナデ	横ナデ			20042600009
第30段9	SD-62	土師器	酒杯	(口径4.1cm)		(0.5cm)	明褐色		横ナデ	横ナデ			20042600011
第30段10	SD-66	土師器	杯	(口径4.5cm)		(0.3cm)	明褐色		横ナデ	横ナデ			20042600012
第30段11	SD-67	弥生土器	甕	(口径5.6cm)		(0.8cm)	にぶい褐色		刷毛目	ナデ			20042600013
第30段12	SD-97	弥生土器	甕?	(口径2.8cm)		(0.6cm)	褐色		横ナデ	ナデ			20042600014
第30段13	SD-97	弥生土器	甕	(口径4.9cm)	10.8cm	(0.8cm)	褐色		刷毛目	ナデ			20042600015
第30段14	包倉遺	弥生土器	甕	覆元16.0cm		現存7.2cm	褐色		横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ			20042600023
第30段15	包倉遺	土師器	甕	(口径4.9cm)		(1.5cm)	淡黄褐色		横ナデ	横ナデ			20042600018
第30段16	包倉遺	土師器	甕肥子	(口径5.5cm)	(現存4.3cm)	(2.4cm)	淡黄褐色		オサエ				20042600019
第30段17	包倉遺	甕製品	鉢底	(口径7.2cm)	(7.2cm)	(0.4cm)							20042600022
第30段18	SP-70	土師質土器	鉢	(口径8.9cm)		(1.3cm)	暗茶褐色		横ナデ	刷毛目・オサエ			20042600010
第30段19	SK-108	土師器	皿?	(口径1.6cm)	8.2cm	(0.8cm)	灰白色		横ナデ	横ナデ			20042600016
第30段20	包倉遺	瓦質土器	甕	(口径7.5cm)		(3.4cm)	灰白色		横ナデ・刷毛目	刷毛目			20042600021
第30段21	包倉遺	土師質土器	不明	(口径4.3cm)	(現存8.0cm)	(0.4cm)	赤褐色		蓋面	充填してオサエ			20042600020
第30段22	包倉遺	瓦	軒瓦	(口径4.5cm)	(7.5cm)	(2.1cm)	灰白色						20042600017
第30段23	SP-19	瓦	通瓦	(口径15.7cm)	(高さ11.4cm)	(1.1cm)	黒色		刷毛目	刷毛目			20042600008

圖 版



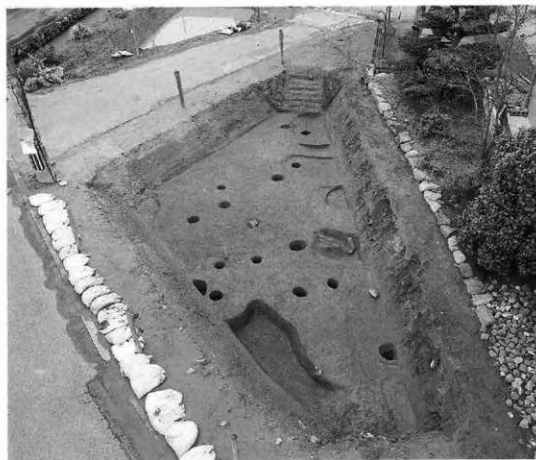
1 調査区より北を望む



2 調査区遠景（西より）



3 第1調査区全景（東より）



4 第2調査区全景（東より）



5 第3調査区西側全景（北より）



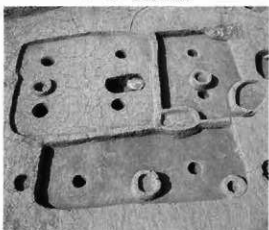
6 第3調査区東側全景（西より）



7 S12検出状況



8 S123検出状況



9 S133・34・35検出状況



10 S147検出状況



11 S148検出状況



12 S194・99検出状況



13 S198検出状況



14 S1100検出状況



15 SD1 検出状況



16 SD14 検出状況



17 SD92 検出状況



18 SD96 検出状況



19 SD97 検出状況



20 SD92 土層断面



21 SK66 検出状況



22 SK66 検出状況



23 出土遺物



24 出土遺物



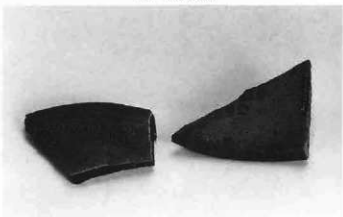
25 出土遺物



26 出土遺物



27 出土遺物



28 出土遺物



29 出土遺物



30 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おがわいせき							
書名	小川遺跡							
シリーズ名	久留米市埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	第 2 1 6 号							
編集機関	久留米市 文化観光部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel: 0942-30-9225 Fax: 0942-30-9718 E-mail: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査の原因
	市町村	遺跡番号		°	°			
小川遺跡	福岡県久留米市 田主丸町船越	40203	旧田主丸町 遺跡番号	33° 21' 2"	130° 42' 52"	20050710 { 20051019	1,500㎡	道路改築
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小川遺跡	集落	弥生 奈良	溝状遺構 溝状遺構 竪穴住居 ビット 土壌		甕 土師器 須恵器			
	城館跡	平安 中世	溝状遺構 ビット 土壌		黒色土器碎片 瓦 瓦質土器			
要 約								
小河氏館跡推定地であるが、今回の調査では、断定する要素が少ない。しかし、包含層に当該期と考えられる遺物が含まれる。調査区の南には伝小河伊賀守の墓がある。 遺構面は3面あり、1面は1区東側のみに広がり中世～近世で、西側は2面目にまで広がっている。そのため2面目は、弥生～中世、近世が混在する。3面目は、弥生時代であり、溝状遺構のみを検出。これら3面の遺構は東に隣接する一ノ上遺跡との関連が想起される。2・3区では堆積土から2面のみ確認する。これらは中世以降の遺物が主である。								
土木工事の届出日	16久工管第310-1号平成16年7月13日			遺物の発見日	16教生文第216号平成16年12月16日			

小 川 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第216集

平成17年11月30日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 文化観光部 文化財保護課

印 刷 香和印刷株式会社